




博士学位論文審査要旨

学位申請者氏名	錢秀双
論文題目	植物に関する日中両語表現についての認知言語学的研究
審査委員（職名・氏名・印）	
主査 教授	久保田 篤 
審査委員 教授	岡部 嘉幸 
	教授 平野 多恵 
論文審査結果	(<input checked="" type="radio"/> 合) 否)
論文審査の要旨	<p>本論文は、日本語および中国語における、植物に関するメタファー表現・慣用表現を対象に、認知言語学の視点から、種々のレトリック表現の分析を行った論考である。全9章から成る。</p> <p>第1章は序論で、「認知」と「言語学」の関わりを各研究文献に基づき整理し、この論文における研究目的・研究対象・考察方法などについて述べる。第2章では、論文全体を支える理論的背景について記述を行っている。認知言語学研究の流れを顧みたくうえで、「認知と言語の関係」を更に掘り下げる。また、キーワード「レトリック」「メタファー」「比喩」「命名論」などの定義付けを先行研究の見解をもとに整理している。</p> <p>第3章・第4章・第5章では、植物に関わる比喩について日中語対照研究を行う。指摘されている特徴は日中の微細な差ではあるが、興味深い分析であり、十分な評価ができる内容となっている。第3章は、「人間（の営み）」を植物の生長過程を通して捉える「植物としての人間」というメタファーが存在するとした研究が提示する、四つの見方に基づき、「植物としての人間」に関する表現を考察した章である。植物の生長過程に関する言語表現が、人間の様々な営みに使われるという点は、現代中国語においても現代日本語と共通しているが、差も見られるとして、日本語の「開花」はプラスの描写のみであるのに対し、中国語の「开花」は「摔得屁股开花」（転んでお尻が「開花」してしまった）のようにマイナスの描写になる場合もあること、中国語の表現「种子」（種）や「开花」は日本語より比喩表現としての生産性が高いこと等の注目すべき特徴が明らかにされている。第4章は、人間（の営み）を表す植物に関する四字熟語の、会話談話における応用状</p>

況の考察である。従来の研究は、概念メタファー《人間は植物》に関する表現の、具体例の分析・理解にとどまっていると指摘し、まだ明らかにされていない応用状況の追究を目的として設定する。具体例が会話談話のどの場面で応用され、どの程度の応用頻度かという点を確認しつつ、使用頻度の低い四字熟語グループなどが見出されている。第5章は、植物の生長に関わることわざの分析である。ことわざには隠喩は多くないとする先行研究に対して、植物の生長段階に関することわざには隠喩が様々な形式で見られると指摘した意欲的な論である。三つのフレーム（「表現形式」「構成要素」「全体表示と文脈」）を提言する研究に基づきながら分析を行い、中国語には直喩型のことわざ（「まるで」に相当する語句を有することわざ）もある等の日中の相違が記される。

第6章・第7章・第8章では、それぞれ個別に清新なテーマが追究されている。第6章は、概念メタファーの「まだら問題」という、比喩研究のなかで最先端のトピックを扱った章である。「まだら問題」と名付けられた、容認度に差が生じる現象（例えば、概念メタファー《感情は水》において、「勇氣」が、「あふれる」「湧く」等は容認可能だが、「流れる」「漏れる」等は容認不可能）が、概念メタファー《メンタルは植物》に存在するか確認を行う。「根+（助詞）」と形容詞の組み合わせについて、容認判断や比喩として成り立つかどうか等が詳細に検討され、新見を得ることに成功している。第7章は、中国人日本語教師に日本語メタファー表現に対する解釈（理解）のアンケート調査を行い考察した章で、方法的・理論的に大きく進展させたというほどではないが独自性があるものとなっている。「壁の花」「同期の桜」「濡れ落ち葉」等の植物が含まれるメタファー表現の難易度を考察しており、例文の選定にやや疑問を感じる部分はあるものの、語句単独の場合と例文中の場合の理解度の相違や、「桃李」は中国では「徳のある人」よりも「学生」の意として理解されがちである点など、興味深い知見が得られている。第8章は、中国語の茶飲料と化粧品の命名論である。認知言語学における命名論の方法論を十分に消化し、植物由来の名づけが多い中国の茶飲料名と化粧品名を巧みに分析した章で、論文全体のなかで最も学術的価値が高い。また、茶飲料名で「桃」「莓」等を果实名だけでなく掛詞的あるいは擬声語的に用いる例や、化粧品名（化粧品の「あだ名」）に、「緑」や「ろう梅」に当たる語が使われる一方で、日本と異なり「大根」「肉」「腎臓」「でぶ」「お婆ちゃん」に当たる語が用いられた例もあるなど、印象的な特徴が多く示されている。茶飲料の命名と化粧品の命名との関係については、論文中に触れられてはいるが、この二つの商品の命名の共通性と差異が詳細に分析されれば更に良い考察になると見られる。最後に第9章として、結論と全体のまとめが記述され、今後の展望についても述べる。

以上のように、本論文には注目すべき重要な指摘が随所に見られ、高く評価できる論考となっている。扱っているテーマは、これまで取り上げられることのほぼ無かったもので、独創性も顕著に認められる。全般的にやや細部にこだわる傾向があり、更に考察を深めて欲しい点（日本と中国の感覚の違いや文化的背景など）もあるが、それは今後の発展が大いに期待できる余地があるということでもある。堅実な調査・記述が行われていることから、十分な説得力を有する成果であり、本論文は博士（文学）の学位に相応しいものであると判断できる。